
みーげる　へーげる

美希マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みーげる　へーげる

【Nコード】

N6352Y

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

僕の平凡な日常が非日常に変わる瞬間は、客観的に見て正しい事をした瞬間。その先に待っていたのは悪意だった。

その日常は苦痛を麻痺させ、次第に別の悪意を生んだ。

その日常は快楽であり喜びであり、仲間達との青春だった。

その日常は真実を覆い隠し、自らの信念をも濁らせた。

僕と、私の本質が、一人の男子生徒の自殺によって引きずり出される。

これは、学園生活の中で生まれる、それぞれの幸福追求。それ以上でもそれ以下でもない。

——僕は知った、そこに幸福が無い事を。彼は実行した、それが幸福であるという事を。彼らは言った、今が幸福である事を。私は気づいた、その先に幸福が待つことを。

(巻) (前書き)

この物語で、一番悪い奴はだあれだ！？

(巻)

幸せってなんだろう。

分からない。

幸福ってなんだろう。

分からない。

追求すれば見つかるのだろうか。

分からない。

果たして存在するのだろうか。

分からない。

それは単なる価値観ではないのか。

分からない。

人類共通の幸福という物はあるのだろうか。

分からない。

その幸福は、一般論や道徳や倫理で固められたものではないのだろうか。

分からない。

いつか、その答えは出るのだろうか――

分けが分からない。

混乱する、困惑する。

見ている物に違和感しか感じない。

自分で見ているのかさえも危ういほど曖昧な感覚。

本当に自分が見ている物なのだろうか。

では。

これは誰が見せてるんだ。誰の視点だろうか。誰の目だろうか。

気持ちが悪い。

だから、何も見たくない。

何も見なければ良い、そう、何も見なければ良いはずなんだ……
けども、周囲が煩い。

とても煩い。

脳に虫が集るような気持ち悪さ。

うるさいなあ。

ホントにうるさいなあ。

あー、うるさい。

うるさい、うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい
うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうる
さいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい
うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうる
さいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい
うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうる
さいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい
うるさい

「度々度々度々度々弩劬努怒度々度々度々度々度々お×さあ、い
×死×××？」

大男が何か音を発している。

「×在×体×迷×××ね、礪礪礪レ？糲？例礪？？×か×害××
ね？」

小人も何か音を発している。

「公×なら仕方×××——××安×で平×な×らしを守る×、××
が×を汚して××除×し××れば×り×せ××。民の×××……区
九々九俱俱ククク駟9句？？苦」

「樸茶侘×咤詫？×なよ。？？？？誅蛛？著緒著貯蹠儲蹠蹠蹠
猪箸楮蹠樗苧？？？紵、××××邪蛇者砂射の×舍洒謝だろ（笑）

この世に、本当の幸福なんてないのだ。

いつも通りの何の変わりも無い帰りのホームルームが終わり下校時間となる。まるで平和だとしても言わんばかりに、本当にいつもと変わらないホームルームだった。

明らかに異様な雰囲気のを、まるで見えていないかのように振る舞った教師は逃げるようにして教室から出て行った。それも含めて普段と何ら変わらない風景である。

教室から教師が去った後は部活へ向かう者、そのまま教室に残って立ち話する者、それぞれがそれぞれの放課後を過ごし始めていた。僕はもちろん率先して速やかに迅速に早急に直ちに……けれどもぼんやりと下校活動に精を出す。

学校から家に帰りつくまでの、その瞬間瞬間に全力をかけるというあの伝説の帰宅部に入部したのだ。まだ1年の僕は帰宅部の補欠だが、3年に上がる頃にはきっと帰宅部のエースとなり後輩に慕われ、また憧れを一身に背負い下校に命をかける僕は背中で“帰宅とは何か”を物語るのだろう。

そんな意味不明な妄想で気を紛らわすうちに今日の部活は終了となった。

鉄筋コンクリート7階建、築5年、家賃は管理費込で8万9千円、1Kの502号室、それが我が城“HAPPY白波レジデンス”。

格別に日当たりの悪いこのアパートのどこがHAPPYなのか疑問であるが、高校生にして一人暮らしという夢のまた夢、更に夢の夢の夢であるこの偉業を成し遂げた事に対する自己評価は非常に高く、それは、もう、まるで、そんな、だから、こんなに、もっと、とっても、軽快に、そして、だけど、唐突に、僕は、猛烈に――
――とにかく最高の気分である。

自然の光を照明に……が謳い文句だったはずの全面ガラス張りのエントランスを通ると、その暗さからエレベーターに辿り着くまでにはダウンナー効果が得られる凄いエントランス。

詐欺じゃね？それ詐欺じゃね？と皆さんが思っわけなので、全6
2戸の内の半分以上は空室という素晴らしい物件である。

いやいや、エントランスごときで騒ぐなよ。と堂々と言い張りた
いところだが、部屋の日当たりも素晴らしい……素晴らしい酷い。

高台から見下ろす9億ドルの夜景……という破格の謳い文句だっ
たはずの景色は今や森林に遮られる有様。

緑のカーテンという小規模な活動が発展し緑の壁となり、そして
出現したのが緑の場所。グリーンスペースそれは、もはや単なる“森”である。

夏の夜は、その素晴らしい景色と共に過ごすはずの大窓は、今で
は望まぬ来訪者である——無視したくてたまらない、けれど無視は
出来ない、無死が好ましいのは分かるが、到底人類とは分かり合え
そうのない“奴ら”。その奴らを多数招くだけのただの透明な四角
エタ形である。

現在は、自然と一体化9億ドルのO₂（酸素）を……が謳い文句
のHAPPY白波レジデンスである。

エレベーターで5階まで上がると、T字路が待ちうける。エレベ
ーターの位置は『T』の字の丁度縦と横が交わった部分である。エ
レベーターより左に501～503までの3室、右に504～50
6までの3室、正面に507～510の4室という並びである。

さて、僕が居住する502号室とは、501号室と503号室の
間にある——言わば両室に守られし特別な一室である。

そう、ここは特別な一室である。

僕は玄関の扉の前で少し躊躇した。それはなぜ？それは……特別
な一室であるからだ。

そう、ここは特別な——

なんか、こう、とっても特別だと思っ………んだけど。

だけど………あ、魔法的な何か——

（大型のトラックが地響きを上げながら付近道路を通過した後、サ

イレンを鳴らしまくるパトカーが1台付近道路を通過した後、道を開けると救急車が1台サイレンと音声で周囲を威嚇しながら付近道路を通過していった）

そして静寂。

ふう。頭の冷めたところで普通に鍵を開けて部屋に入った。もちろん普通の、ごく一般的な、何の変哲もない、単なる1Kである。

「ただいまなさいませ、御主人様」

誰に言ったわけでもなく『今まさに自分は家に帰って来たんだぞ感』を実感する為に家に帰るととりあえず一言発している。これはもう習慣と言ってもいい。

暗い部屋の電気を付け、靴をそこらへんに投げ捨てる。とりあえず、この“正しく着る事の出来ない”制服から部屋着に着替える。途中、ゴミ箱に溜まったごみ屑を見て、今日は燃えるごみの収集日だった事を思い出す。

次回こそはと誓を立てる……が、その誓はこれで何度目だろうか
と呆れを通り越し笑いも通り越し、やっぱり呆れた。

『今日の課題、英語の教科書の翻訳』

割かし優等生の僕が、学生が最低限度学ばなければならないレベルの問題でつまづく筈がない。レッツチャレンジ。レッツパーリertime。

・I eat out almost every day . How about you ?

（私はイータ。いつも毎日出ていけ。あなたは？）

・I never eat out .

（私こそが絶対イータ、出ていけ。）

・ Do you know how often are the Olympic games held?

(あなたはお布団の中でやるオリンピックのゲームを知っている?)

・ Yes, I do. Once in four years, aren't they?

(はい。耳が性感帯です?)

・ That's right.

(ですよね)

単語「comb」……(昆布)

あまり英語は得意ではなかった。イッツアパリージョーク。

年齢16歳。

血液型A型。

身長167センチ、体重58キロ。

健康状態……至って良好。

精神状態……至って不良。

悩み……普通。

実行した対処……気にしない。

期待される効果……即座に忘れ去る。

得られた結果……精神状態至って不良。

頼れる友人……いない。

頼れる両親……良心の欠片もない。

普段からあまり悩まないように努力している。

思考を切つて無にするか、なるべく別の事を極端に激しく考え、没頭するようにしている。

けれど、時に現実を直視しなければならぬ時が必ずある。そう、今のこの状況のように。

「改めて見ると……酷いな」

それはもはや制服などとは呼べない物に変わり果てていた。ある意味斬新なファッションとも呼ぶ事は出来るが、制服には不要なファッションセンスである。

半袖シャツだった袖は荒い切り口でノースリーブとなっていた。

通気性抜群の、ある意味ダメージ加工と呼べなくもないが、そんなものはいらない。

胸の部分は、まるで刀にでも切られたか、斜めにズバシユツと大根ほどの大きさの切り込みがパツクリ開いている。これもある意味ダメージ加工と呼べなくもないが、そんなものもいらない。

胸ポケットの付近には油性マジックで『僕はイジメられています。誰か助けてください』と書かれてある。メッセーj性の強い文章の入ったシャツに変身したが、そんなものもいらない。ちなみに個性を尊重した自由な校風なせいか誰も助けてはくれない。

ズボンはこの有様。

右足部分は最上部までスリットが入りパンツも見えちゃうセクシィさ。

左足部分はさながらホットパンツ。ふとももまでクッキリ見せちゃうセクシィさ。

これらを身に纏った僕は、そう、ファッションリーダーである。ファッションの最先端を行きし選ばれし者。まだ誰も荒らしていない未開の土地を先陣切つて歩きだす勇者である。

そして人は、僕の足跡だけを頼りに、見えない僕を追いかけるのである。

である。

であるである。

であるであるである。

であるであるである。

であるであるであるである。

であるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるであるであるであるであるである。

であるであるであるであるであるであるであるであるであるである。

「——ッ！！」

時に現実を直視しなければならぬ時が必ずある。そう、今のこの状況のように逃げられない時が必ずある。

過酷な現実を見てしまった時、必ず僕を襲う激しい頭痛。その頭痛は僕の目を奪う。そして誰かの目を見せる、僕じゃない誰かの視点であたかも自分で見ているように錯覚させる。

だから僕は目をつぶる。見たくない物を見ないように、その非現実を見ないように目をつぶる。

現実さえも見えてしまわぬように、僕は今日も目をつぶる。

「おい、ちょっとコツチ来いよ」

陰鬱に若干首を右に倒し、目線も右下に落とす。

面倒だ、学校とは最高に面倒だ。

ちなみに面・胴とは剣道の用具の事であり、また技の事でもある。面を打つ技は一般的に面打ち、引き面打ち、小手面打ちなどが挙げられる、胴を打つ技は胴打ち、引き胴打ち、抜き胴、逆胴打ちな

どが挙げられる。

そして今、僕は……充実した氣勢ではなく、適正な姿勢でもなく、竹刀の打突部で打突部位を刃筋荒く打突されたのである。無論残心もない。

「っ……!!」

「イエー、一本!!」

「ほらほら遠慮すんなよ、剣道やろうぜ。青春しよーぜ」

「えっ、何うずくまってるの?つまないんだけど、ほら立てよ」

なぜか椅子から叩き落とされていた僕は、倒れた椅子を立て、座り、姿勢を正した。

「あ、てめコラ。何かとしてんの。喧嘩売ってる?」

「口利けなくなったのかよ、何か喋れって」

「ひゅーひゅー、平然としちゃってカツコイイー」

「なあーもう笹原君さあ、最近コイツつまんねーから顔面イッチャつてよ。竹刀でバチコーンって顔面イッチャってよ」

「いやいや、さすがに顔面は目立つべ?」

「いや……逆に良いんじゃない?むしろ健全じゃね?」

「お、一理ある系。青春真っ只中の高校生に傷の一つや二つ付き物だっつーの」

「はい3!!」

「2!!……!!」

「1!!……!!」

「ホームラアアアン!!!!!!」

物凄い音と衝撃だった。

頬の骨と皮膚が竹刀に叩きつけられる音と衝撃。

椅子から吹き飛ばされ椅子ごと地面に叩きつけられる音と衝撃。寸前で机に手がかかり机が倒れる音。

そしてその机が僕の身体に降ってきた衝撃。

瞬間、コイツらはもはや人じゃない。そう思った。

そう思ってしまった時に、いつも通り気分が悪くなっていた。

頭痛も酷いや。

しかし、その頭痛が本当に頭痛なのかよく分からなかった。顔が死ぬほど痛かったからだ。

ついでに地面に落ちた時に鼻をぶつけたらしく、鼻血が止まらな
かった。

僕はクラスの保健委員と委員長によって保健室へ運ばれた。

.....○

残念ながらそのような美談は存在しない。

僕は自分の力で立たなければならなかった。

自習時間である。今、この時間は自習時間である。生徒は全員席についていながら、誰一人として僕に手は差し伸べられないのだ。

虐殺行為の標的となる事、早一ヶ月。これまで、一度も手を差し伸べられた事はない。それはこれからも同じだろう。

だから僕は一人で立ち上がる必要があった。

痛みに顔を顰めながら人とは呼べない4つの生命体の方を向いた。

すると足元で倒れていたはずの机が無くなっていた。

目の前にいたはずの4つの生命体もなくなっていた。

目の前にあるのは同じ柄の8つの柱と、四隅の柱がつき出た壁であつた。

8つの柱は可動式であつたやうで、その内の4つがのっそりと動いた。

「ババババババババババババババババババ」

突然何かが上空で鳴った。あまりの大音量に身を竦め、壁の方を後ずさった。

「具が画が画が画が画が画が画が画が画が画が画」

恐ろしい、天地が裂けてしまうのではないかという恐怖に駆られ、

僕は走った。

しかし、迫る8つの柱が扇状になり僕を囲んだ。後方には例の壁逃げ場がなくなった。

「愚ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲ」

「死氏司師シし市詩四士史紙紙誌資詞子視志斯此私自齒使支」

「化か書かかか書かか化か書かか化か書かか」

僕はその恐怖に耐えられなくなり……膝から崩れ落ち、目をつぶり、抵抗を止めた。

気を失っていたのかもしれない、直前の記憶は曖昧であるが、今の僕の状態は明白である。

ここは保健室だ。

その独特の匂いと、周囲を覆うピンク色のカーテンがその事実を推測させるのには十分過ぎるほどの証拠である。

この状況でこの状態。理解した。

どうやら、悪夢はまだ終わっていないようだ。

親切心があるのなら、こんな事にはなっていないだろう。

僕を連れてきたのは親切心からではない、悪意だ。

そして……保健の先生は居ないだろう悟った。

なぜならば、僕は上から下まで、いや辛うじて足の先だけ纏う物があったが、それ以外何一つ身に纏っていないかったからである。

パンツを脱がせ靴下一枚残す保健医がいるだろうか、いやいない。

これは明らかな陰謀である。

「いやーマジ俺ら神じゃね？」

「笹原君さあ、面倒だからもう制服燃やしていいんじゃない？」

「あ、マジ天才（笑）」

「アイツ午後から全裸系じゃん（笑）」

「だと思いました、そう来ると思って——じゃん。アイツの体操服も確保しましたあ」

「パネエ！！エスパー！？用意周到すぎて惚れる」

「アイツマジで午後から全裸系じゃん（笑）」

「じゃ起きるの待たずに放置でいいか。教室戻ろっぜ」

「ウェイイ」

ドアの開け閉め。

そしてリノリウムに響く足音が遠ざかって行った。

心に穴が開いていくような気がした。そんな感覚だった。

イメージではあるが、ハート型の心の中心に丸い穴が開き、さらにそのハート型を誰かが適度な強さで鷲掴みしているような、そんな感覚だった。

——泣きたくなった。

「丸山君……今日のさ、課題……良かったら家でやらない？」

「……いや、今日はいいや」

「………そっかぁ」

「………」

「………」

「あのさ……腕………大丈夫？」

「………うん、まあ、割かし」

帰り道だった。

辺りはもうとつくに暗闇に包まれ、さらに僕らは外灯の少ない細道を歩く。

僕らの交わす会話は多くない。それはいつもと変わらない。

二人の足音だけが夜の細道に響いている。

お互い家への分かれ道は小さな公園である。丸山君は公園を通り

抜けて帰り、僕は道なりに進む。

僕らは無言で分かれ道まで辿り着いた。

いつものように丸山君は公園へ入っていき、僕はそのままアスファルトの上で別れと再会の挨拶を交わす——はずであったのだが、その日は違った。

「ちよつと話していかないか」

丸山君の突然の提案に、時計の秒針が止まっている時間くらいの

間が開いた。

「うん」

即答した。嬉しかったから。

ブランコに腰を下ろした丸山君の表情はいつもと変わらなかった。僕はいつだってその表情を見て心配になる。普段通りだからこそ心配になる。

「……疲れるんだ」

丸山君は呟いた。

何が？と聞き返したくならないのは、その理由が直ぐに浮かんだからだ。

「うん」

僕は丸山君の隣のブランコに腰を下ろした。

「もう、嫌だなあ」

僕は正面やや下の、落ち葉に焦点を合わせていて丸山君の方を見ていなかったが、その一言が何を現しているのか、声の震えから感じ取ることが容易に出来た。

僕は少しでも丸山君の助けになればと思い、慰めの言葉をかけた。かけてしまった。

「が、頑張ろうよ。丸山君」

その言葉がどれだけ無責任な発言だったか、僕はその時まだ知らなかった。

丸山君は明るい笑顔と面白い話で将来芸人にでもなれる逸材だと思った。

体格が良いというか、太り気味な感じだった為、容姿で人を見極めるタイプの人間は所見では避けられていたが、持ち前の明るさと笑い話でクラスの人気を勝ち取っている途中であった。

僕らの高校入学から1か月が経過した5月の話。

気がつくと丸山君はクラスを中心男子4人と行動を共にする姿をしばしば見かけるようになった。

明らかだったのは4人の中での丸山君はイジられキャラのパシリだった。

初めは、何処にでもある悪ふざけだと思っていた。

けれど5月の後半に差し掛かる辺りにはおかしい事になっていた。明らかに丸山君が異常だった。

授業中に突然先生の前で煙草に火をつけて吸おうとしたり、突然机の上に立ち踊りだし、あからさまな授業妨害を試みたり……気がつくと丸山君は人を笑わせるではなく、人から「笑われる」人になっていた。

その頃には誰もがその独特の空気みたいな物を感じ取っていたと思う……ああ、彼は虐められているのだな、と。

しかしその虐めが公になる事は“最後”までなかった。

奴らは巧妙だった。まるでお手本とも呼べる虐めだった。

先生の前ではあたかも仲良さげに振る舞う。それは完璧なまでに自分たちで丸山君を怪我させておいて、大勢の前で善人のように治療する。その繰り返しだった。

僕はそんな奴らを許せなかった。

それまで丸山君とはろくに会話は交わさなかったが、誰かが助けてあげないといけないと思った。

正義を語るつもりは全くなかったが、その一方的な悪意を許したくはなかった。

誰も手を差し伸べないのなら、僕が差し伸べてあげればいい。

その考えに辿り着いたのは、丸山君が明らかに虐めを受け始めて2カ月ほど経っていた日の事だった。

授業と授業の間は小休憩兼、次の授業の準備に充てられるのが通常であるが、奴ら4人にとっては単なる遊び時間と化す。

「おい、デブ」

「は、はい」

4人の内の一人、たかはし えみし笹原笑士が丸山君を呼びつける。それを聞き残りの3人が自然と笹原の机に寄って来る。

笹原笑士は奴ら4人の中でリーダー的存在である。彼は暴力の天才である。

入学早々3年生と問題を起こし、一躍有名になり上級生から目を付けられたらしいが、その全てを自らの武力で粉砕した為、現在の学校で彼に手を出す者はいなくなったという。

中学卒業までラグビーで慣らしていたというその体は大人顔負けである。

「笹原君さあ、少しは丸山君を労わってあげなよ（笑）」

嫌みたらしく心にも思っていない事を言うアイツはかさみともあき風見知明、僕は

彼こそが4人の中での実質的なリーダーだと睨んでいる。アイツの頭の回転と策略、そして会話術はきつと将来有望な詐欺師にでもなれるだろう。

その悪意だけを前面に醸し出しているならまだ良かったのだが、アイツの恐ろしさは表の顔である。

父は政治家、母は弁護士。そんなとんでも両親を持ち、成績は学

ポイントガード

年トップ中のトップ、更に1年生にしてバスケットボール部のPGとして早くもレギュラー。そこに爽やかで笑顔は輝いて見える程のそのルックスが備われれば女生徒だけでなく、先生からも絶大な人気と信頼を誇る、人としての完成形である。

世論はアイツの一言で白から黒に変わる。

よしもりみなと

その2人にノリ重視のただのバカ吉森湊と、ルックス勝負なら風見以上の身長180センチ越えて趣味が女遊びのさいえだ ゆうすけ西枝雄介が加わる。

ちなみにこの学校は馬鹿学校ではない。全国1位なんてことは決していないが、結構有名な進学校である。

風見以外の3人は馬鹿だが、世間一般の高校生に比べたら数段に頭が良い。だから厄介だ、奴らもある程度考える力を持っていると

いう事が。

「呼んだら来いっつったろ？」

いつものように奴らが丸山君で遊んでいる。

楽しそうな4人とは対照的に丸山君の表情はいつも強張っていた。

「ほら、行くぞ」

笹原に肩を組まれ、大きなはずの丸山君の体は一回りも二回りも小さくなっているように見えた。

奴ら4人は丸山君を連れて教室の外へ出て行った。

やがて小休憩の終わりと次の授業開始を告げるチャイムが鳴ったのだが、奴らと丸山君は帰ってこなかった。

「おい、その席は風見と笹原と……。アイツら何処行ったか誰か知らないか？」

数学教師の田中の質問に誰も答えなかった。

どうやら本当に誰も彼らの行方を知らないらしい。

「風見も一緒かあ、誰か急に体調を崩したり怪我でもしたか……まあ始めるか」

先生達の中で風見は天使か何かにでもなったのだろうか、いつもの事だがその度に思う。

その時だった、ガラリと教室の後ろの扉が開き笹原達が戻ってきた。4人だけで。

「すみません、先生。コイツがプリント窓から落としちゃいまして、外まで探しに行っていました」

4人とも息を切らしているという、迫真の演技。そして風見は漫画のように右手で吉森の頭を持ち強制謝罪をさせている。どんな状況だ、とツツコミを入れたくてしょうがない。

「おお、そうか。今度からは気をつけるよ」

「はい」

そんなアツサリとしたやり取りで遅刻の件は流された。

まあ僕としても本来ならそんな若干の遅刻くらい厳しく罰しても

らいたいなどとは思わない。けれどこの件はここで收拾が着いたといえる状況ではないのだ。

「あれ、風見。丸山は一緒じゃないのか？」

そうだ、奴らと一緒に出て行ったハズの丸山君はまだ帰ってきていないのだ。

「え………はい、分らないですね」

4人で顔を見合わせ、あたかも本当に知らないという素振りを見せた奴らを見て心底腹が立った。きっと丸山君は何か戻るに帰れない状況に違いないと確信した。

クラスの皆は何も言わない。

きつと僕だけじゃないはずだ、丸山君が奴らと一緒に教室から出て行く姿を目撃したのは。

僕は何も言わない、言えないクラスの連中にイラついた。そこに僕も含まれているのだから尚の事イラついた。

それなら僕が言ってしまうばいい、そう思った。鶴の一声で皆も賛同し後に続いてくれると………そう信じて。

「先生、僕、風見君達が丸山君と一緒に出て行くのを見ましたッ」

——言った。

手を挙げるのと同時に、その勇気の量同等の頼りない声で、しかし確実に先生には聞こえるボリュームで。

見てはいないが、奴ら4人が面食らう表情と、クラスの皆が希望を抱いたのが手に取るように分かる気がした。

確信が持たなかった僕は、自分の席の2つ左隣の列の少し後ろ——風見の席を眼球だけで追った。

「——っ！！！！！！」

交わる視線の先は、悪意と敵意に満ち溢れた、そんな風見の目だった。

瞬間、時が止まったかのような錯覚を覚えた。

——寒い。

まるで壁が凍りとなり、冷気でも発しているのか、体温が奪われ

ていくのを感じた。

「お、本当か——風見達何か知っているのか？」

沈黙は5秒にも満たなかったはずだが、体感ではその5秒は5分ほどの長さに引き伸ばされていた。

「あつ、そういえば教室を出るときに丸山君が保健室へ行くと断っていたのを思い出しました！」

「おー、そうか。分かった」

それだけだった。

状況の変化は認められなかった。

いや、僕にとってマイナス方向に進んだ事だけは明白だった。

昼休みになり、教室に活気が溢れる。

購買や学食に走る者と音、弁当組の机を付けておしゃべりを始める者と音。

一方の僕は保健室へ急ぎたかった。

丸山君の無事を見届けておく必要があったからだ。さすがに加減は分かるはずだが、何か手遅れになってからでは遅い。

胸騒ぎがした。

僕は教科書を雑に机の中に入れ、席を立った——途端に暗雲が立ち込める。

「なあ、お前さあ、さっきの何なの（笑）ウケ狙いつすか？」

吉森湊がチャラチャラとポケットに手を入れて僕の進路を妨げる。

「全然おもんなかったんすけど（笑）」

僕は吉森湊の顔を見ずに彼の脇を抜けようとした。

「——っ、ごめんなさ……」

早歩きで2歩目で誰かにぶつかってしまい、すぐさま謝ろうとしたが、相手は最悪の野郎だった。

「なに、お前。てか誰——！！」

「いつ——」

ぶつかった相手は笹原だった。

そして、たかがぶつかっただけで僕はなぜか胸をどつかれ教室の後方の壁に背中を強打する羽目になった。

僕が壁と衝突した音で数秒だけ教室が静まり返ったが、それも数秒の出来ごとだった。

皆何事もなかったかのように食事やおしゃべりを続けた。

「笹原君、笹原君。コイツコイツ、さっきの」

「あー、こいつだったの。存在感ねーから分かんなかったわ」

風見がバスケット部のミーティングに行った事が僅かに救いがあるかと一瞬思ったが、この状況の対処法は僕の経験と知識にどれだけ検索をかけても回答は見当たらなかった。

「何お前俺らを悪者みたいな事言ってるの？　なあ？」

威圧される。

僕は言い返せない、というより言葉が出てこなかった。

適切な言語の選択に時間がかかる、頭の中で一字決めるのに膨大な時間がかかる。

「しゃべれねーの君？　日本語分らない？　小学校からやり直す？」

隣で吉森が煽る。

ああ、これは終わったな。殴られるなという感が働き自然と目に涙が溜まる、そして強張る顔を更に引きつらせ……抵抗の案を検索するのを止めた。

「そおーゆー態度が1番いかんですよー（笑）　やっちゃいます？　ねえ、やっちゃいますか笹原君——」

殺る、か。死にはしないよな、と僕は覚悟を決めた。

どのタイミングで来るのか、それだけに集中していた。

「——エミちゃん、みなっちゃん。彩子が中村先輩紹介してくれ
るっつーけど行く？」

パンチの代わりやってきたのは、購買で買ったのであろうパンを口に啜えた西枝雄介だった。

彼の一言で、それまでの緊迫した空気が中和されていった。

「……………あれ、もしかして何かお取り込み中だった？」

「あ……………」

笹原が吉森と顔を見合わせ呆れたような、けれど愛のある笑みを浮かべた。

「おー、わりい行く行く」

笹原がそのまま廊下へ去っていく。

正直ホツとした。これほどまでに西枝雄介独特のマイペースな雰囲気ありがたいと思った事はなかった。

心のメーターが安堵へと向かった。

「……………お前後で覚悟しとけよ」

心のメーターがすぐさま危険領域を振り切った。

「何やってんのみなつちゃん。置いてくよー」

「はいはいー、ごめんねー」

その吉森の一言は、とても後味が悪かった。

僕は保健室へ急いだ。いまだ教室へ戻らない丸山君は大丈夫だろうかと心配だった。

南校舎の2階から、北校舎の1階を目指し早歩きで移動する。

その途中だった。

「あははは、戒^{えびす}さんそのバツシユ何年使ってんすか。年期入りすぎでしょー」

「あ、うるせーよ（笑） お前みたいな金持ちと違って物を大切にしてるんだよ」

ミーティングを終えたらしいバスケ部の集団がコチラへ向かっていた。その先頭に3年生の先輩と風見の姿があった。

通り過ぎるのを待つべきだろうと少し後方へ下がり壁際で待機したのだが……………風見が僕の姿を見るのをハッキリと感じた。

「戒さんすみません、ちょっとその“友達”に用があるんで自分先行つてもいいですか」

「おお、じゃあな。放課後練習サボんなよ」

「はい。失礼します」

まさかと思つた、冗談じゃない。

というか僕のことじゃないよね。と思いつつも僕は一度引き返そうとした。

「——待てよ」

ガシリと右肩を掴まれ、自然と背筋がビクリと伸びた。

心臓が高鳴った。

掴まれたのは肩のはず。僕の真後ろから肩を掴む手の感覚は確かにある。

けれど僕はその時、心臓を掴まれたような、そんな嫌な苦しさを覚えた。

「……………何、か……………な？」

恐る恐る振り向くと、細目で僕を見下すような視線がそこにあった。

「は？ 何かな？ こっちが何かな、なんですけど。何か言いたい事あるんでしょ」

「今は、特には……………」

「今は？ じゃあさっきはやっぱり有つたんだ」

「……………いえ、別に」

目上の人でもないのに、自然と敬語になつてしまう。怖かった。

僕は何か思い違いをしていたのかもしれない。

風見は所詮裏方だと決めつけていて、僕は某猫型ロボットが登場する漫画のキツネ顔の彼くらいにしか思っていなかった。

けれど、それは違つたと今確信した。

「だまつてないでさあ——」

ズズっと一歩僕に近づいた風見の右手が僕の胸に伸びた。

（——ふぐッ）

胸倉を掴まれた事による息苦しさの他に、シャツの生地が肌に食い込む痛みが走った。

「謝る？」

この局面で僕の頭の中に浮かんだ選択肢は……………一択だった。

「——あゝい」

「許さないけど——ねッ」

「がッ——うッ」

胸倉を掴む右手で一旦僕を引きよせての膝蹴り。

蹴る力に加え、僕を引きよせた力が加わる。力の矢印が僕1点に集まった。

「ぐっ……………ああ……………う」

激痛。

その場に蹲った僕は、痛み以上に呼吸が出来ない事の焦りを感じた——溝を狙いやがった。

「あゝーはーあゝーはー」

大げさに呼吸をした結果、とりあえず呼吸困難で死ぬことはないくらいの酸素の供給がなされた。

「バーカ」

誰もいない廊下の隅で座り込む僕を横目に、風見が真横を通り過ぎて行った。

一難去ってまた一難、僕が丸山君の立場だったなら生きていけないだろうなと思った。

保健室にようやく辿り着いたのは昼休みも終わりに近づいた頃だった。

「失礼……………し……………まーす」

恐る恐る部屋へ侵入するも、どうやら保健医は現在不在らしく室内はがらんと静まり返っていた。

（誰もいないのか……？）

物音一つしない一室に、丸山君はここにはいないという可能性が急浮上した。

では丸山君は何処へ行ってしまったのだろうか、と僕はクルクルと辺りを回りながら考えた。

（昼休みもあと15分ほどしかない……教室へ戻った方がいいのだろうか）

もしかすると行き違いになったのかもしれない、もう教室へ戻ったのかもしれないという可能性は捨てきれない。いや、きっとそうに違いない。

なぜならば、丸山君は奴らの“あの”仕打ちをもう何か月も耐えている強い人間であるからだ。たった数時間だが自分も同じような目に合つて分かった、“あんなの”に負けない丸山君は凄い。

僕の思考はそういう結論に至った。

さて戻ろうと僕は保健室の出入り口へ向かった——のだが引き返す。

（カーテンで仕切られたベッドの方で物音……）

てつきり誰もいないと思いこんでいて調べはしなかったが、誰かベッドで寝ている生徒がいるのか……あ。

確信した——丸山君だろうと。

カーテンをゆつくり開くと……案の定丸山君が寝ていた。

本当に寝ていたのである。

（ああ、本当に体調が悪かったのか……）

安堵。

（……………）

決めつけ。

早とちり。

勘違い。

空回る。

——僕だけの不利益。

結果として、僕がただ単に奴らに喧嘩を売っただけ、ということだ。

「丸山は早退したからな」

今日最後の授業である現国教師の鈴木が告げた。

僕は昼休み以降何も頭に入ってこない状態である。

ぼんやりとする頭は灰色である。

戻す事の出来ぬ失態を悔やみ、今後の不安だけが押し掛かる。

(どうしたものか……)

なるようにしかならない状況、少なくとも今は。それは分かっている、まだ奴らに動きはないのだから……

■今回の作戦

作戦No.01『学校からの脱出』

「内容」

《難易度：C》奴らと遭遇する前に学校から脱出せよ!!(尚、明日の事は何も考えていない)

「方針」

チャイム後にダッシュ。

「成功率」

58%前後(前後の振れ幅：-58%+42%)

「結論」

やってみる。

チャイムの音が鳴り、掃除時間となった……掃除時間！？
(んまつ、いきなりの盲点！！)
ミッシヨンの変更を急速に行う必要がある。

■今回の作戦

作戦No.02『掃除時間を乗り越えろ』

「内容」

《難易度：D》清掃時間中に奴らと遭遇するな！！

「方針」

掃除、サボる。何処かへ、隠れる。

「成功確率」

68%前後（前後の振れ幅：-68）+22）

「結論」

やってみる。

オーケー、やってみるしかない。

僕は力サカサとまるでGのように教室を出た。

今週の担当掃除区域は幸いにも中庭であつた為、普通に掃除していても奴ら4人は全員室内なので見つかる事もないであろう、と安心の上に暗示をかけた。

割かし真面目な生徒なので結局割かし真面目に掃除をする。

落ち葉を掃いて、ゴミ袋に詰める。

他の人達（同区域担当）は他の仕事をやったりやらなかったりで

ある。

その内の『やらなかったり』に分類される松本君が1人黙々と落ち葉を掃いている自分の元へやってきた。

「あのさ、大丈夫？」

主語が無くとも、何について心配されているのか分かった。

動揺を悟られてはいけないと思い、僕は一度心を落ち着かせてから応対した。

「ま、ままま、まままあね」

情報の漏洩は阻止できなかった。

「あつ——」

松本君はこれから僕に色々と質問をしてくるのだろーと思ったが、予想は外れ慌てて元の位置に戻って行った。

そしてまるで今のやり取りはなかったかのように一生懸命掃除をしていない。

なんだ、おかしいぞ。

僕は頭を回転させた。ブレイクダンスでもすればもっと頭の回転が早くなるのかしら、という発想が浮かび上がったところで松本君に遅れを取る事約20秒、明らかな危険を察知した。

「アイツ掃除場所中庭だろ？ 中庭ってどこなの？」

「笹原君掃除真面目にやってないからー（笑）」

「っせー（蹴り）」

「あいた」

BGM——シューベルト的な偉人、「魔王」的な曲。

僕は脳内で魔王的な曲が流れ始めた瞬間、まだ第一小節半ばあたりで電光石火の早技を見せ裏庭移動した。

（あわわわわわわ）

予想外の展開である。

笹原と吉森がわざわざ僕を迎えにやってきたのだ。

" Du l i e b e s K i n d , k o m m , g e h m i t
m i r ! g a r s c h o n e S p i e l e s p i e l
i c h m i t d i r ; 的な

奴らの馬鹿声はまさにゲーテ的な人の作詞した魔王的な一節その物に聞こえた。

恐ろしい。殺される……平和が良い。

僕は今まさに憲法第9条の事が大好きになった。もはや憲法第9条の申し子と言っても過言ではない。

争わない事の素晴らしさ！！

万歳！！万歳！！敗戦国だけど平和に万歳！！！！

(よしッ！！)

僕は意を決して——逃走し、残りの清掃時間を職員トイレの中で過ごした。

作戦No.02『掃除時間を乗り越える』——成功

僕はタイミングを見計らい担任と一緒に教室へ行くという名案を実行に移し見事に成功させた。

教室に入るまでは担任ガードが無敵効果を生んだ。

皆が席に着き始めたギリギリのタイミングで僕も席に着き、なーのホームルームが始まって……やがて終わった。

作戦No.01『学校からの脱出』が開始となる。

「起立、気をつけ、礼——」

僕は、「礼」の「れ」でスタートを切った。

——ビーチフラッグスを彷彿させるスタートの爆発。

それほど大げさに走ったわけではないが、気分は毎年某神社で福男を決める例のアレだった。

『歩く』の上位互換として『早歩き』が存在するように、僕は『走

る』の上位互換である『早走り』で靴箱へ向かった。

風を切って早走りする僕はさながら——軽自動車のようなのである。それがあまりトップスピードの出ない僕にとっての限界のラインだ。

馬鹿にしてはならない!!

燃費の良さと小回りの利きが最大の武器なのだ。

僕は颯爽と最終コーナー（角）を曲がり靴箱へ到着した。

（……誰もいない）

どうやら学年単位でも1番乗りのようだ。

ここまで来ると警戒のレベルが下がり『安全』という言葉が見えてくる。

（——助かった）

僕は荒れる鼓動を落ち着かせながら自分の靴の元へ向かった。

（……………）

僕は再度周囲を確認し、もう一度自分の靴のある“はず”の場所を見た。

（——ない）

個別の小さなロッカータイプの扉を何度開け閉めしてもそこにあるはずの靴が無いのである。

（靴が勝手に歩いて行ったなどという、メルヘンか？）

無理がある。

そんなはずはない……疑心暗鬼にならざるを得ない状況である。

奴らを疑う他ない——

「……残念」

その疑いが、真相に変わり果てた。

「——なッ」

マイシューズをブラブラと見せつけながら、そこに居るはずの無い風見が玄関に出現した。

「あまーい」

ズズズッと急速接近され、たじろぐ。

「驚きすぎでしょ？（笑）」

風見はこちらを向いたまま僕の靴を後方——即ち外へ順に投げ捨てた。

「さっきまで教室に居たはずじゃあ……」

これからの恐怖よりも、その疑問が1番知りたかった。

「は？ 掃除サボって部室に居ました、その帰りですが？」

僕はそれほどまでに視野が狭まっていたのかと、自分に失望した。見つからない事、帰る事に意識を集中しすぎていた性で、奴らの行動については一切考えていなかった……。

「そんなに走ってさあ……何か用事？」

「う、うん。まあね……」

「ふーん。じゃ帰れば？」

本当に帰してくれるのか怪しいが、それ以外何もない僕は恐る恐る風見の横を通り抜けようとした……スリッパのまま。

「スリッパ持ってかえんの？（笑）」

もう風見の姿は振り返らなければ視野に入れることは出来ない位置である。よって、振り返るべきではないと思った。

「——まあね」

ダッシュ。

ダッシュダッシュ。

ダッシュダッシュダッシュ。

スリッパのまま外へ飛び出し、玄関前の数段の階段辺りに転がっている靴を素早く拾い——とりあえずスリッパのまま校門まで駆けた。

校門を超えたところでようやく振り返る……追手は無かった。

そこでようやく靴に履き替え、スリッパを鞆に詰め込み早走りで家へ帰った。

家はいいよね。

いや、家で無くともいい。プライベートルームだ。

プライベートルームは大切だ。

身体の休息も大事だが、何より僕は『心休』が大事だと思うんだ。心を休めると書いて『心休』、僕が今考えた造語である。

僕はパラパラと国語辞典を流し読みしている。

飽きないんだよね国語辞典。

まあ、手ごろな辞典なら何でもいい、英語でもスペイン語でもこ
とわざでも動物でも。

パラパラと流し読みをして、「これだ！」と思う言葉なんかを
見つけた時の喜びはまるで、海で見つける綺麗な貝殻のようさ。

(……ポエってみた)

気温が下がったような気がした。

そろそろ夕飯を食べようとソファから立ちあがった時に膝が手
に持っていた国語辞典にクリティカルヒットし辞典が上空を彷徨つ
たあげく落下した。

(……………)

風見の膝蹴りを思い出してテンションが82下がった。

「……はあ」

溜息を吐いて転げた辞典を拾い上げようとする——偶然開いたま
まになっているページに『休心』という言葉が存在した。

意味はさっき僕が創った『心休』と同じだった。

……………テンションが22下がった。

……………カチ、カチ、カチ、カチ。

時刻は25時49分……………

2 + 5 + 4 + 9 = 20。

20……………二重。

二重……………うな重。

うな重……………高い。

高い……ジャングルジム。

ジャングルジム……四角イッパイ。

四角イッパイ……丸いおっぱい。

おっぱい……s、f g せ k w g f q w k、d g！……！！

いかん、思考が小学生レベルまで落ちていた。

もっと知的度溢れる言葉で脳内が埋め尽くされる予定だったのに

……。

……カチ、カチ、カチ、カチ。

掛け時計の時を刻む音がとても煩く感じる。

こういつ時に秒針がカチカチ動くタイプではなく、滑らかに絶え間なく動き続けるタイプの時計に懂れる。

「いつその事デジタルで良いんじゃない？」

……。

……カチ、カチ、カチ、カチ。

ガバリと起き上がり声高らかに宣言したものの、自分の声が空しく反響しただけであった。

眠い……（だったら寝れば！？）

いやいや、そういうわけには……（明日寝坊するぞ？）

んー、分かつてはいるんだけど……（だけでも？）

ねえ？（ねえ？）

……。

（寝ると明日が来るわけで、明日になればガッコ行かなきゃならんわけで、ガッコは地獄なわけで）

明日の苦痛を先延ばす。

必ず来る明日を少しでも遅らせる為に。

（俺の本^{マジ}気を見せつけてやるッ！！）

今日は寝ないと、固く決心した。

《Set Up》

《Flight System—CLEAR》

《Fight System—CLEAR》

《AIR System—ERROE》

《Guard System—ERROE》

《—ERROR》

《—ERROR》

《—ERROR》

《Total Balance—Attack&Run》

「ダメよ!! 発進許可は出ていないわ!! 戻りなさい!!」

「……………」

《Power Gauge—4,5》

《Weapon—Sword&Gun》

《—READY—》

「もう無駄よ、奴を倒したところでどうにもならないわ!!」

「……………」

「応答しなさい!!」

「……ザー、ザッ……ザー」

「(……外部通信?)」

「——行けッ!!!! 行くんだ!!!!」

「その声は……丸山君!? どうして君が!？」

「0.1%でも希望があるのなら、それにかかる以外何があるって
いうんだ!!!!」

「——拠点D、被弾……生存者無し。」

「その機体はもう闘える状態じゃないわ!! 無謀よ!!!!」

「行けッ!! お前の信じる道を!!!!」

「——対象、本部に接近中……高圧エネルギーを探知——マズい!
!!!!!!」

「やらせるかあああああああああああ!!!!」

《—GO—》

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

皆が僕を……見て来たからだ。

大丈夫、一人でもやれるさ……きっと。
たぶん。

結構。

意外と。

おそらく。

ちよつとだけ。

ずいぶん。

少々。

……… 大丈夫。

幸福を追求する権利はあるらしい。

けれど、その権利を行使しても、幸福がどの方角にあるのかが…
…まだ分からない。

(壱) (後書き)

次回も読む事！

ココまで読んだキミと、作者との約束だよ？

(貳)

(まずは、素肌を覆うもの。それが衣服であるなら直良し)
カーテンから顔だけ出し周囲を伺うが、見る限り目ぼしい物は何もない。

それも当然である、ここは保健室だ。

(……掛け布団か、カーテンか)

僕はより軽量なカーテンを選び、保険医の机の上のペン立てにあるハサミを取った。

公共物破損などと言っている場合ではない。

僕はそのデカすぎるピンク色のカーテンを半分の半分の半分まで切った後、丁度いいサイズのそれを体に巻いた。

その姿はまさにピンク色の変態だった。

(……oh)

長時間行動は出来ない。

迅速に次の代用品を探さなければならない。

(……ゴクリ)

中途半端に重い扉を少しスライドさせて、前方を伺う。

この保健室が突き当りの角部屋で良かった、と僅かな幸運に浸る。もしも周囲を他部屋に囲まれていれば、左右の先の先、両端にまで警戒をしなければならなかったところだ。

とりあえず前方。

目の前は男女トイレ、その先に東階段と連絡通路、その先に生徒会室など4室が並び、その先が西階段となっている。

闇雲に動いて誰かと遭遇してはいつかんの終わりなので、目的地を設定しておいた方が良さだろう。

時計を見ると、幸い午後1発目の授業中のようにこの階に居る生徒は少なそうだ……多少の大胆なら許されるか……？

■ 今回の作戦

作戦No. 29443 『無事に生きて帰る』

「内容」

《難易度：A》着替えの調達と生還。

「方針」

ステルス機能あればいいなあ。

「成功確率」

2%前後（前後の振れ幅：-198）+3）

「結論」

たぶん無理。

たぶん無理だけど……ダメ元でやるのは本当にダメだ。
失敗した場合、僕は社会的に死ぬ。

だから、たぶん無理だけど……生き残る気でミッションを遂行する。

《——Mission Start!!——》

タイミングを見計らい、静かに廊下へ出た。

ッ………………!!

「男子生徒Aが現れた——！」

なんという事だろう、この不運。

隣の男子トイレからぬーっと人が現れたではないか。

全身ピンクマントの男を見て彼は何を思うのだろうか……。

このカーテンマントをバツと広げると、本当に全裸なのだから、それはまさしく変態だ。

「……………（二カッ）」
とりあえずの愛想笑い。

「……………（ペコリ）」
失笑。

良かった——対話になりそうだ。

「……………（ペコ、ペコ）」
愛想笑い。

「……………（ペコ、ペコ）」
去り際の苦笑い。

僕は前を向いたまま後ろ手で保健室のドアを開け、スタート地点に戻った。

危なかった、もしも今の男子生徒Aが気性の荒い奴、もしくはノリで生きてる人間であつたならば僕はもう死んでいた。

彼が、気の弱い・空気の読める・立場上僕と類似しそうな人間で本当に良かった。

きっと御手洗（大）かなーなどと思いつつも、ミッションは仕切り直しとなった。

《——Mission Start!!!!——》

（……………ゴクリ）

どうしても音が鳴ってしまつ中途半端に重いドアをゆっくりとスライドさせる。

（……………前方、OK）

今度は焦らない。もう一呼吸待つ——
よし、心の信号が青色に変わった。

GO!!
すうーつと保健室から飛び出す。

すうーつと飛び出した時に自らが巻き起こした風が……………下半身あたりをふわりと愛撫した。

（あぶwふgくうgfwf。いf——あぶねッ！！！）

学校の廊下ともあろう場所で、自分の股間を晒してしまいそうに
り焦りに焦る。

これは……向かい風も追い風も危険だ。

二重に巻けるくらい長さにしとけばよかったと後悔するも、も
う後戻りはできない。

………最初の難関は、やはり東階段であろう。

一本の直線である廊下は見通しが良いが、階段は危ない。慎重に
足音を確認しなければならない。

トイレ出入り口横の壁にピタリと張り付き、そおつと階段を伺う
……この状態もあり長く続けてはならない。

なぜならば……階段からは死角になっているが、正面の廊下から
は丸見えどころか単なる変態だからだ。

一瞬で良い。その一瞬過ぎ去る事が出来る間があれば………。

足音は無い……前方に人も無し。

GOGO！！

ささささつと東階段横を通り過ぎる——問題はここからだ。

もう保健室への後戻りが不可能に近くなった。見つければ……そ
れは即ち御縄だ。

となく『早く・正確に』というプロフェッショナルさが求めら
れるのだ。

前方誰もいない事を確かめ、姿勢を低くして（窓からも丸見えな
のだ）早走り！！！！

「――」

肘を曲げ、腕を体の方へ倒す。その走りはまさしく忍者だ。

きっと今の僕は足があり得ない早さで動いているから漫画みたい
に残像がとつちらかつているだろう。

忍者早走りで生徒会室の隣の隣の隣、保健室から見一番奥の教
室を目指す。

随分走ったような気はするが、実際のところ距離は50メートル

もない為あつという間だった。

(――― 演劇部の倉庫!!)

周囲は誰もいない。

作戦の第一段階は成功だ。

僕は演劇部倉庫のドアに手をかけ―――ガン。

―――ガンガンガン。

もちろんだろう。

もちろんのことだろう。

(鍵が……開いていない……)

逆になぜ今、演劇部倉庫が開いているなどと思ったのか、考えてみれば逆に不自然だろう。

そんな都合良く屋上や空き教室が開放されているようなメルヘンは現実では存在しないのだ。

屋上なんて、入学最初のオリエンテーション的な時以外では開放されていないのだよ。

(――― はわわ)

ピンクの変態マント男である僕は焦った。

次の作は―――ない。

早くも手詰まりだ。

脳裏に『ゲームオーバー』の文字が浮かび上がる。

それでタイトル画面に戻ってもう一度やり直せるなら良いが、現実はそのはいかない。

社会的な意味でのゲームオーバーなんて一生の終わりだ。

僕は一度落ち着こうと思った。

が!!

そんな時間はない。

いつ誰がやって来てもおかしくない状況。真横には西階段だつてある。

考えろ、考えるんだ。

(…… 小学校低学年の時にゲームオーバーの事をゲームオバサンな

んて言つてたのがウケてたけど、いったい何が面白かったのだろうか)

頭の中のいったいどの引き出しにしまい込んでいたのか分からない、全く不要な記憶が零れ落ちた。

.....。

..... 3秒くらい無駄な時が流れたような気がする。
考えろ、考えるんだ。

焦らず急げ、きっと何か方法があるはずだッ..... と思いたい。

何か無いのか、何か何か——例えば、例えばなんだ。
ピッキング!?とかその類。

(確か何か..... なんとかかんとかつてのが——そうッ、あれだ!!
『サムターン回し!!!!!!』 いやいや、今それ全然関係ないから。あれ確かなんか専用の道具要るよね、泥棒さん御用達の。なんか昔ワイドショーでやってた。って今そんな事考えてる場合じゃないんだよ、何か方法、漠然としてるけど何か方法——はッ!!
!!)

脳をかき乱した性が、またしても僕の記憶の引き出しの隅から何かそれらしき断片が零れた。

《ほ..... 下..... 揺..... ぜ》

思い出す、もっと思い出す。

記憶をたどる。

光景を思い出す。

風景を思い出す。

声を思い出す。

言葉を思い出す。

《..... ら..... に..... れば..... だぜ》

穴埋め問題を埋めるように、少しずつ点と点が線になっていく感覚。
覚。

あの時の自分を思い出す。
何をやっていたのか。

核心には迫らずに、外堀から埋めていく。

その時自分は何を感じたのか。

そして僕は、何を得たのか……。

《……、……やつ……揺さぶれば……開いちゃうんだぜ》

《ほら、こう……上下に……、鍵……だぜ》

そして、鮮明にその時の事を思い出す。

僕は、記憶の断片をパズルのように正確に合わせ、一気に引き上げた。

「ほら、こうやって上下に揺さぶれば、鍵開いちやうんだぜ」

あれは中学1年の時だろう。

まだ家に自分専用のPCを持っていなかった僕等は放課後、よくPC室で遊んでいた。

もちろんPC室は放課後自由に使っていいという事はなかった。

僕等はどうにか侵入できないものかと考えた。

その集団の中に居た、当時陸上部だった佐田という男。

あまり仲が良かったとは言えないが、こういう時は自然と一体感が生まれるもので気にはしなかった。

先生が施錠を忘れていけないか、など無駄に浪費する日々は、彼の一言が突破口となった。

《陸上部の部室だった窓開けられるんだけどなあ》

僕等はその事を話し半分に聞いていた。
で。

実際に陸上部の部室で実演してもらった。

「ほら、こうやって上下に揺さぶれば、鍵開いちゃうんだぜ」

窓を上下に動かす事により、年期の入った緩いクレンセント錠はその窓の振動で開いてしまうと云う……僕等にとってそれは魔法のようだった。

次の日、その陸上部の窓のクレセント錠とPC室のクレセント錠

を比較した。

その結果、僕等は両方が一致する事実を確認した。

残念な話し。長期休暇中に学校の改装工事と共に、その魔法の使用不可能となった。

たった1学期間の僕等の冒険と悪行であつた……。

（それだ！！！！）

僕は直ぐに演劇部倉庫の窓の上部と下部に手をかけた。
ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ。

音は仕方がない。

素早く終わらせれば大丈夫なはずだ。

当時の事を思い出す、ただ単に上下に動かすわけではなく、クレセント錠側をより強く動かす感じ。

ガタガタガタガタガタガタ。

徐々に可動範囲が広がる――

（勝った――）

確信する。

頃合い……最後は力強く、強引に窓に開こうとする力を与えると
カラカラカラ……

窓がレールを転がり、開いた四角形からは小道具や大道具が散乱した――室内の様子が。

（久々にやった……このやってやった感懐かしい）

などと悠長に感傷に浸っている場合ではなかった。

奇怪音に誰かが気が付いたのか、リノリウムを鳴らす足音が聞こえてきた。

（――マズい！！）

自らが発していた音で周囲の音に気付けなかった――

僕は演劇部倉庫に飛び込むようにして侵入し、窓を閉め、息を殺

した。

カツ……カツ……カツ……カツ……。

足音は大きさを増していた、それは確実にコチラに近づいている証拠。

壁に耳を当て、足音の行方を正確に確かめる。

カツ……カツ……カツ……カツ……

耳に届く足音よりも自分の心臓の鼓動の方が大きい気がしてならない。

この鼓動が外に漏れてないだろうかという余計な心配までしてしまふ。

カツ、カツ、カツ、カツ。

近い。確実に近い。

響いた音が伝わっているのではなく、足音そのものが耳に届いているのが分かる。

カツ、カツ、カツ、カツ。

マズイかもしれないという思い込みが始まる。

姿を見られたか？ いや、それはないはず……たぶん。

負のイメージがドツと流れ込んでくる。

もしかして……

ひよつとして……

まさか……

自然と、呼吸が荒くなる。

何かを信仰しているわけではないが、頼む。都合の良い時にだけ

イメージする神様とかいう謎の概念に、お願いします、どうか！

！と頼み込む。

カツ！カツ！……カツ！……カツ！……！！

（——マズい）

カツ！……カツ！……カツ！……カツ！……カツ！……カツ……

……
足音は遠ざかって行くのが分かった。

(……………安堵＆安堵です)

足音は連絡通路の方へ行ったようだ。

サンキュー謎の神様。

助かった。

いや、待て。まだ全裸ピンクマント状態に変わりはない。まだ

助かったと言うには早すぎるにもほどがある。

僕は辺りを見渡しそれらしき物を見つけた。

黒のペンでデカデカと側面に『衣装』と書かれたダンボールだ。

開けてみると、貴族的な衣装やら、ドレス的な衣装やら、樵的な

衣装やら、演劇部丸出しな衣装たちが詰め込まれていた。

(もっと普通に着ても違和感ない物はないのか?)

この学校の演劇部の規模からして、もっと普通っぽいというか、使い回しの過去の制服とかあっても良いと思う、という予想はそれから数分後に的中した。

(ナイスですね)

見事なまでに男子の制服だ。OBの置き土産だろう。

これで僕は堂々と校舎を徘徊出来るわけだ、第一関門は突破。

ノーパン

(……………)

股の辺りがすーすーした。

次だ。

このまま今日は授業を放棄して家に帰りたい気持ちでイッパイだが、最終的には教室へ戻らなければならない。

鞆だ。

教科書類だけなら放置で良いような気もするが、携帯と財布が入っている。さすがにその2つは必要だ。

徒歩通学で家に非常食はあるし、確かに1日くらい無くて生きられるが、盗難にでもあつたら一大事。

(……………しかし、どうするか)

現在、絶賛午後の授業中。これから戻るか……いや、これは皆が帰った後、放課後になってから戻る方が安全だろう。もう全裸ピンクマントはおさらばした事だし。

では時間までどこに身を潜めるか……。

(……………お、く、じ、よ、う?)

一瞬、ほんの一瞬だけ脳裏にある風景が浮かんだ。

その刹那、全身に虫が這うような気持ち悪さと、廃工場のような薄気味悪さと、視界の収縮に襲われ嘔吐寸前までの息苦しさを感じた。

全身に嫌な汗がジワリと滲んだ。

頭痛。

途端に教室の床の中央辺りがぐにやりと歪んだ。

空間が捻じれたような——歪な形をしていた。

その歪な空間は蜃気楼のように、近くて……遠かった。

文字通り、地に足がついていない感覚。

逃げようにも一歩踏み出せば、その捻じれに自分も吸いこまれてしまいそうな気がして足が竦んだ。

(何かにつかまらないと——)

僕は膝をつき、衣装のダンボールに手をかけようとした。

ようとした。

ようとした。

実際に手をかける事は出来なかった。

僕の膝の辺りまであったはずのダンボールはそこに存在しなかったのだ。

その代わり、足元にはキャラメルらしきものが落ちていた。

親指と人差し指でキャラメルらしきものを拾い上げると、中から色とりどりの……粉?糸くず?みたいなのが落下していった。

そのキャラメルらしきものに気を取られている隙に、室内中央の歪な捻じれは無くなっていた。

まばたきをすると、今度は床が遠ざかっているような気がした。

おっと。気を付けないと、天井に頭をぶつけてしまいそうだ。
自然と前かがみになる。

まばたきをする。

まばたきをする。

なんか、耳の奥がザーザーいつてる。

なんか、気持ちが悪くなってきた。

なんか、船の上でゆられているような心地。

まばたきをする。

なんか、目の奥がチカチカする。

まばたきをする。

なんか、景色がアレみたいになってる。あのピカソ的な何かの、
ゲルニカの何か。

なんか、気持ちが悪い。

なんか、超気持ち悪い。

なんか、誰かが僕を見ている気がする。

じいーっと見ている気がする。

誰？

誰、誰？

誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰？

耳鳴りが酷い。

原因は分からない。

医者に診てもらった時に、簡単に貧血だと診断された。

とんでもない貧血だ。

恐ろしい貧血だ。

そんなわけない貧血だ。

あつてたまるか貧血だ。

まあいい、対処法は経験から知っている。

さっきは失敗したんだっけな……………。

目をつぶり、何も考えない。

見えてる物は捨てる物。

聞こえる音も捨てる物。

全てを自分でシャットダウン。

ただただ黙って目をつぶる。

やがて、不要物は減っていく。

呼吸も落ち着いてくる。

大丈夫。

人間って意外と強い。

この程度は大丈夫。

丸山君の受けた苦痛に比べたら――

「……………」
周囲の音が正常に聞き取れるようになった。

午後の最初の授業が終わり、移動する生徒の足音や声で廊下は賑わっていた。

「……………」
思考が正常に戻ると、その状況はマズいと思った。
誰かがここに入ってきたら大変だ。

全裸ピンクマントは回避しているが、演劇部とは無関係な人物が鍵も無しに侵入しているんだ、それはいけない事だ。
では、どうする？

- 1) 外側の窓から逃げる。
- 2) 次の授業が開始して周囲が落ち着くまでここに潜む。
- 3) 普通にドアから出ていく。

答えは(3)だ。

1番リスクが少ないはずだ。

この学校の演劇部の規模を考えれば、部員に遭遇する確率極小だ。
だから堂々とドアから出ていけば、見られてもそこに不自然は生まれにくいはずなんだ。

(1)と(2)は何かあった場合に振り返しがつかなくなる。

僕は普通にドアの内側の鍵を開け、普通に演劇部が倉庫として使っている教室から出て行った。

廊下には普通に生徒がいて、普通に日常生活を送っていた。

僕は普通の顔をして――

（あれ、結局どこに身を潜める事になったんだけ？）

……………決まっていけないという事実を思い出した。

（――あつ）

ぼん。と閃き。

（保健室でいいんじゃない？）

良い案。下手に動くより元の位置に戻る方が自然も自然だ。

それに、一応僕は元々体調が悪かったからここに運び込まれたわけ、保健室に居てもいいという正当な権利があるではありませんか。

（んまつ、これは明暗を分ける名案でございますね）

僕は普通に保健室へ向かい――普通に入り――そして普通にベッドで寝た。

地獄の訪れは、教室に入った瞬間だった。

「……………」

そこに在るはずの僕の机が、そこに無かった。

なんて古典的な嫌がらせだろうかと呆れたが、昔の人も考えたものだ……これはとても腹が立ち、そして――それ異常に悲しい。

「あれ（笑）？ キミ誰（笑）？ 転校生（笑）？」

茫然と立ちすくむ僕を吉森がチャラチャラと煽る――ムカつく。

「はい、これ」

「……………えっ」

一瞬分けが分からなかった。

けれど、その行為が僕に差し向けられたものだと思いついた時に、話が繋がった。

僕に解体された、平べったいダンボールを差し出した彼は、奴ら4人の中の誰でもない。

けど分かる。この行為が意味するところを考えれば自ずと結論が

丸山君が——そこにいた。

「おおデブ。コイツお前とコンビ組みたいらしいぞ（笑）」

[illegible]

平然と席に向かう丸山君の背中が、とても頼もしく感じた。

一人じゃない。

その事実は何よりも心強く、そして支えだった。

僕は丸山君に助けられてばかりだった

「いいよ。僕がアイツらの相手するから……キミはその隙に帰っていいよ」

「—でも」

「いいんだ」

「う、ごめんね。ありがとう!!」

こんな事ばかり繰り返していたような気がする。

僕はそんな丸山君からの日々増え続ける莫大な借りを、最後まで一文たりとて返済できなかった。

Give & TakeのTakeは、全くと言っていいほど出来なかった………僕が、弱いから。

逃げてばかりいた。

隠れてばかりいた。

恐れて、丸山君に頼つて、そして丸山君が受ける仕打ちを目の当たりにして……余計に恐れて。

一つの恐怖が、まるでウイルスのように体内のいたる部分に感染し、数を増殖させていった。

でも、丸山君は僕にとって大切な、友達以上の、親友と呼ぶべき存在だった――

目が覚めて、まず始めにココが家ではない事に気がついた。

頭の中で、追体験のような事が行われ、情報を整理した後にようやく、これから自分が何をすべきなのか分かった。

(……………行かねば)

時計に目をやると、掃除の時間はとうに超え、長く見積もっても帰りのHR終了から20分は経過しているだろう。

……………生徒を保健室に残し、保険医は相変わらず不在、担任も来ていない――もし僕が夜まで寝ていたらどうするんだ。という謎の怒りがこみ上げてきたが、とりあえず今集中しなければならぬ方へ意識を切り替えた。

立ち上がり、ひんやりとするスリッパに足を入れる。

保健室を出ると、上の階や外など、いたるところから響く生徒たちの声や音がしていた。

僕はゆっくりと階段を上る。

様々な音が反響する中で、僕の歩くこの階段は自分の足音だけが鳴り響いていて……………なんだか、とっても……………寂しく思えた。

教室の前に到着した。

室内からの物音などは一切聞こえない。

(……………はあ、さすがに奴らは帰ったか)

やや安心……………というより、今日一日の疲れが重くのしかかり、ぐったりとした状態でドアをスライドさせた――

「うわっ、マジかよー!!」

心の猫耳がビクビクと反応した――が、時既に何とかかんとか。

ドアは開かれていた。

「……………」

「——— おおー!!ビックリした(笑)」

状況は最悪だった。

笹原、風見、吉森、西枝の4人が教室で暇を持て余していた。

「お、スゲーじゃん。ちやっかりお召し物ゲットされて(笑)」

「へー、なにそれ。誰の? パックたの?」

「うわっ(笑) パクったとか犯罪ですよん(笑) 窃盗罪ですよん(笑)」

「ウエーイ、しもしも? ミナちゃん? ん……………今日の夜? ん」

「メンドイ(笑)」

《—— Mission Failed ——》

心の中で色々と諦めた。

奴らの顔を見た事で余計に疲労が溜まった気がして、よりグッタリした。なんか、色々と、結構、とにかく、結論……………ダルかった。

「おやおや(笑) お帰りになられるのですか(笑)?」

「……………」

「え、無視っすか(笑)?」

「……………」

状態異常……………強気、喧嘩腰

「何コイツ、喧嘩売ってる?」

「コイツ結構最悪だよな(笑)」

「俺もそう思う(笑) ツーかさあ、正直デブが死んだのお前のせいじゃね(笑)?」

「

「ッ」

聞き捨てならない一言。

「確かに（笑） 1番酷かったのコイツだよな（笑）」

「……あ？」
「おまえらだろ」

「お前らのせいだろ——お前らのせいで丸山君が死んだんだろ！！！！！！」

「はー？ てめえ何ふざけた事ほざいてんの？」

「散々好き放題やった当事者が何をとぼけてんだ！！！！！！ふざけるな！！！！！！！！」

丸山君は殺されたんだ——こいつらに！！！！！！！！

「いやいや、自殺ゆー結果出ましたやん（笑）」

「お前ら——ッ！！」

もう、こいつら殺す。

「悪いけどさあ、何勘違いしてんの？ 何かお前は俺達のせいでゝみたいな事思ってるみたいだけど、誰かそんな事一言でも言ったか？ あのデブが僕は笹原君達に虐められたのが原因で死にたいです。とか一言でも言ったか？」

「おいおい（笑） なんで俺主導なんだよ（笑）」

「あー、なんとなく（笑） で、アイツが虐められてるとか言ったか？ それともクラスの連中がそんなような事一度でも言ったか？ 教師達が言ったか？ 親が言ったか？……誰も言っていないだろ。証拠もねーだろ」

「言葉にしないと分からない事かよ！！ お前らが1番分かっているじゃないのか！？」

「いやさ、悪いけどさ。 まあお前の眼にどう見えたか知らないけど、俺達は結構仲良かったと認識してたぜ」

この屑野郎が……法律の解釈の違いみたいな曖昧な事いいやがつて。

「そんな事、丸山君の傍にいた僕が証明出来る！！」

「は？ どうやって証明するんだよ。張本人はいないんだぜ、馬鹿じゃねーの。あとさあ、言わなかったけどさあ——その辺の真相を一番良く知ってんのお前なんじゃねーの？」

当然知ってるさ。僕は丸山君と一緒にいたんだ。だから分かる、こいつらの非道さ、汚さが。

「自爆するかと思つて伏せてたけどさあ、お前あの日アイツと一緒に居たんじゃねーの？」

「！！」

脳が燃えるに熱かった。

体が燃えるように熱かった。

怒りは……ここにある。

「え、ちょッ、マジ！？ どこ情報それ！？ 真犯人（笑）！？」

「いやさあ、俺さあ、あの日部活行つてたんだよねー」

「マジそれ超レアじゃん（笑）」

「そこツツコむとこじゃねーから（笑）でさ、俺がちょーっと休憩しよつかなーと思つて体育館抜け出した時に、お前見たんだわ。

なんか血相変えて校舎から出ていく姿……何やってたと思つたんだけど、それから数分後に運動部の悲鳴やらなんやらで大変大変」

「え、それやべーじゃん。落ちる瞬間誰が見た？？」

「それはないみたい。まあ学校側の処理が早かつたんだけどな。その日即行で生徒追い出されて一時校舎閉鎖になつたんだけどな……まあ、でさ——俺てつきりお前が殺したんだと思つてたわ」

《俺てつきりお前が殺したんだと思つてたわ》

違う。アイツらが丸山君を追い込んだんだッ！！

《俺てつきりお前が殺したんだと思つてたわ》

《俺てつきりお前が殺したんだと思つてたわ》
《俺てつきりお前が殺したんだと思つてたわ》

そんなはずない。だつて丸山君と僕は友達――

オマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロ
シタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガ
コロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマ
エガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタ
オマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロ
シタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガ
コロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマ
エガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタ
オマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロ
シタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガ
コロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマ
エガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタ
オマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロシタオマエガコロ
シタオマエガコロシタ

違つ――違つよね、丸山君。僕じゃないよね――

(貳) (後書き)

次回で(上)はオシマイだよ。
絶対読むこと!!

ココまで読んだキミと作者のお約束

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6352y/>

みーげる　へーげる

2011年11月23日04時05分発行